



終わらない。若い頃、『板の心を
知れ』って先輩に言われた言葉
が、まだ頭に引かかっているん
ですよ。最近、ようやくわかってき
た気がしたんだけど、叩くと思
いもよらないと『さ』にゆがみが
出たりしてね。まだまだですわ」

「教えられるのは基本だけ。あと
は本人次第です。メーカーは量
産が前提だから、手作業で全部
を作る必要はない。でも、技術
を身につけた人間が機械を操作
するのとそつでないのとは、
品質や効率が全然違うんです。
喜んで乗ってもらえる車を作る
には、手加工の技術を持ち、そ
れを発展させられる技能者が

必要なんですよ」
板金は、難しい」とも、大変だ
とも、青木さんは言わない。た
だ、奥が深い」とほほえむ。
「板金はずっと挑戦目標であり、
進む方向を示す指標でした。
まあ、人生そのものですね」
職人とは、生涯を傾けられる
分野を見つけた、幸福な人々を
指す言葉なのかもしれない。



青木 佑

昭和17年生まれ。高校卒業後、
富士重工業群馬製作所に入社。
硬式野球部の選手として、昭
和44年には全国都市対抗野球
全国準優勝に貢献。野球選
手時代の経験が今も私の支え
とご本人。その後は板金一筋で
開発車の製作に取り組み、スハ
ル1000ほか数々の名車を送
り出す。昭和50年、一級板金技
能士。平成12年度、現代の「匠」
に選ばれる。

PROVISION

職人の技

シリーズ 自動車板金技術者

ひとつの技術がひとりの人間の血となり肉となるには、りたいだけの時間と集中が必要なのだろう。それを知るために、名工と呼ばれる人々を訪ねていこうと思う。

「設計者があれこれ考え、研究と技術を注いで描きあげた設計図を、忠実に形にする。それが我々板金技能者の仕事です」

それだけのことで、とても言いたげな青木さんは、板金ひとすじ約40年。量産前の試作車を、これまで100台以上も手がけてきた。現代の名工だ。

「自動車は約250点ほどの部品でできていて、そのひとつひとつにちゃんと役割があるんです。だから板金として、何でもやたらとひっぱればいけないものではない。設計者の意図を図面から読みとり、部品の役割を考え、作るものの形状を頭に叩き込むことから、私たちの仕事は始まり

ます」

平面・正面・側面、3方向の図面から立体的な形状を読みとり、展開図を描き、必要な板の大きさを決定する。読図と呼ばれるこの作業を、新人はイヤというほど訓練する。単品の図面を確実に展開できるまでに2〜3年、複数の部品が組み合わさったアッシ図が読めるまでには4〜5年かかるそうだ。

「それから板の切り方、リマーの持ち方、溶接も覚える。まあいちばんは叩き方ですね。板金というものは、要は板に衝撃を与えてひずみを作って変形させていくわけです。そこをどれくらい力であらう叩くと、板はどのくらい変化するのかが、目で見る音を聞いて、手で覚えて、まさに身体で覚えるしかありません」

ベトナムになると、次にここを叩くと鉄板のビーンと音が響くか瞬時に予測できる。完成した部品を見ればそれが誰の仕事

かわかるそうだ。技術が身についていくプロセスを、青木さんは野球に例えて説明してくれた。「口の取り方でもバットのスイングでも、まずは基本を何度も何度も反復練習するでしょ。すると、やがて何も考えなくても身体が自然と動くようになります。そうしたら、もう基本にとら

われる必要はない。基本から離れて、自分の個性を出せばいいんです。板金も同じ。一通りできるのに4年、基本から離れられるまでには12〜13年、そこから先はどれだけ個性を出せるかですね」

野球と違うのは、選手寿命の長さ。青木さんは、板金には終わりが無いと言った。

「試作車の1台目より2台目、その次はもっといいものをと、ずっと挑戦してきました。でも、まだ

まだ、ときどき板の気持ちが悪く、
どうもわからなくなるんです。

富士重工業株式会社 群馬製作所
一級板金技能士
青木 佑 さん

文 = 篠塚 義成
text: Yoshinari Shinozuka

写真 = 林 泉
photo: Izumi Hayashi